

# フランツ・カフカとカール・クラウス -ある親和性の事例-

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 堺 雅志  |
| 雑誌名 | 長崎外大論叢  |
| 号   | 14  |
| ページ | 87-96   |
| 発行年 | 2010-12-30  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1165/00000137/">http://id.nii.ac.jp/1165/00000137/</a> |

## フランツ・カフカとカール・クラウス

—ある親和性の事例—

堺 雅 志

Franz Kafka und Karl Kraus  
— eine Wahlverwandtschaft —

SAKAI Masashi

## Abstract

Karl Kraus' öffentliches Schweigen über Franz Kafka ist ein Sonderfall, der als Verteidigung des Autors gedeutet werden kann. Auf der anderen Seite zeigt sich Kafkas Beachtung von Kraus in einigen seiner privaten Bemerkungen über ihn, die mit der Judentum und vor allem mit der deutsch-jüdischen Literatur zusammenhängen. Beider Haltung zueinander, die sonst an anderer Stelle nicht weiter belegt ist, deutet die gegenseitige Hochschätzung beider Autoren für einander an.

Im hier folgenden Vergleich von Kraus' *Die chinesische Mauer* mit Kafkas *Beim Bau der chinesischen Mauer* sollen zunächst die motivische Ähnlichkeit der beiden Texte gezeigt werden.

Stilistische Vergleiche des Gebrauchs von Zitaten und Collage zeigen weiterhin Parallelen in beider Kompositionstechnik, die die in der Romantik entdeckte Möglichkeit des „fragmentarischen“ Schreibens künstlerisch sublimiert.

## はじめに

20 世紀ドイツ語圏を代表する小説家、フランツ・カフカ（1883-1924）は、当代きっての批評家カール・クラウス（1874-1936）についていくつかの文章を残している。彼が文学的キャリアを始めた当時、すでに多くの読者をえた批評家として不動の地位を占めていたクラウスに、カフカは友人たちに宛てた手紙の中で賞賛と批判を含んだクラウス像を描き出している。クラウスはといえば、カフカについて公には、ひと言の言及もない。

ここでは、のちに 20 世紀最大の詩人のひとりに列せられることになるカフカからのクラウスへの言及と、クラウスのカフカに対する沈黙とに焦点を当て、「批評家」としてのカフカの特色を明らかにするとともに、クラウスの批評家としての一側面を素描するのが本論の目的である。

加えて、二人が「万里の長城」という共通する表題のもとに描いた接近方法の異なる作品について、その主題の近しさ、すなわち中心なき時代に二人が抱いた「書く」可能性への期待（批評的側面）を読み解く。

## 1. 二人の批評家

### カール・クラウスによるカフカ「評」

カール・クラウスは、カフカについて個人誌『炬火』誌上では一言も語っていない。しかし一度カフカの名に言い及んだところがある。パウル・シックの発見によるが、クラウスのある手紙の中にカフカについての唯一の発言が残されている。<sup>1</sup>その内容は、ある出版に対する抗議であった。あるブラハの詩人が、アンソロジーのなかで、その詩人が学生時代、カフカと、後の「文学界」の編集者と友人となったと記していることに対して、そのアンソロジーの編集者に対し、実はクラウスもそのアンソロジーに協力を請われていたが、亡くなった詩人カフカの名前とカフカと生まれが同じだからといってベルリンで活動中の広告審査官の名を並べておくのは不当だと思うと書き送っている。

唯一これだけの発言であるが、これは注目に値する事実である。カール・クラウスは、出版にかかわる手紙にはいっさい応じないのが常であった。応じたとしても、ファッケル誌上で「公に」断りの返答を、しかも皮肉を込めて書くばかりであった。しかしこのときは例外的に私信というかたちで編集者本人に宛てて書いている。これはカフカについて云々する気はないというような消極的な態度表明では決してない。当時カフカは詩人としてはごく一部の人のあいだで、熱狂的な読者を有するのみであった。没後に出版されることになる膨大な断片は別として、公には寡作であったカフカが、文壇という表舞台に立とうとしなかったのも周知のことである。これをクラウスは知らなかったのではないように思われる。つまり、あえて私信にしたという先の手紙の処理の仕方を見ても、クラウスのカフカへの気遣いがうかがえる。

クラウスは、ある作家に対して世の中の判断が不当である場合、筆を執った。カフカに対しては当時、世の判断というものがほとんどなかった。また、クラウスがなした埋もれた才能の発掘という点でも、現にエルゼ・ラスカー＝シューラーやゲオルク・トラークル、ベルトルト・ブレヒトらは『炬火』での紹介によって一躍有名になったが、カフカの場合、本人がそれを拒んでいたのだからそれをあえてする必要はなかった。『炬火』に名前が挙がるということは、よかれ悪しかれ、きわめて悪いことの方が多かったにせよ、人々の注目を集めることを意味していた。チェコ出身のユダヤ人にして、1898年の『炬火』刊行以来、深遠かつ流麗なドイツ語の文体でドイツ文芸・文化・社会批評に旋風を巻き起こしたクラウスは、当時の文壇にきわめて大きな影響力を誇っていた。その影響力を自覚していたクラウスにとって、彼の公的な場である『炬火』誌上にカフカの名を出さなかった背景には、カフカという才能を沈黙のうちに守ったと考えるのも穿った見方ではないはずである。したがってカフカに対する唯一の例外を除く沈黙は、彼を認めていたことを証する極めて重大な事実である。

### 「批評家」カフカ

他方で、カフカはその短い生涯の晩年に手紙の中で、幾度かクラウスに言及している。クラウスと同じチェコに出自を持ち、同じユダヤ系の血を引くカフカにとって、ドイツ語を話すユダヤ人として、アイデンティティの揺らぎを常に抱えていたことは、謂を俟たない事実である。カフカによるカール・クラウスについてのそのわずかしかなかった言及を見ると、ドイツ・ユダヤ文学というカフカがある種の所属意識を有していた領域についての注目すべき発言を取り出すことができる。1921年

6月に、マックス・ブロートに宛てた手紙の中で次のように語っている。

ドイツ・ユダヤ文学というこの小世界には、実際カール・クラウスが、あるいはむしろ、彼の主義主張が支配権を握っています。そうした主義主張に、彼は見事につき従い、自分と主義とを入れ替えて、果ては他の者にまで同じ入れ替えを要求しています。(FK: B. S.336) <sup>2</sup>

中心をどこにも求めることができないばかりか、輪郭もきわめて不鮮明であるドイツ・ユダヤ文学という領域は、そうではあっても古代からつづく民族的喪失感のさなかにあって、「書く」行為に拠り所を求めたユダヤ人作家にとっては、アイデンティティを求めうる唯一に等しい領域であった。そこを遊戯空間として自在に活動するクラウスを見事に描写した一文と言える。けれどもカフカの描写によれば、「支配権」と「主義主張」、「彼（クラウス）」とは、この遊戯空間にあって交換可能であり、それゆえにどこに重心があるかどうかは定かではない。「支配」をめぐる現象のみが、中心なく繰り返されているかのようである。

ところでこの手紙の名宛人ブロートは、1911年から『炬火』誌上に登場し、クラウスによる辛辣な批判を受けた一人である。そしてこの手紙はまた、同郷の友人フランツ・ヴェルフエルとその家族が揶揄されているとされるクラウスの手になるオペレッタ『文学、あるいは、そこに見えることとなろう』*Literatur oder Man wird doch da sehen* (1921) (以下『文学』)への言及を含んでいる。

ずいぶん前にクラウスの『文学』を読みました。おそらくご存知でしょう。むろん既にずいぶん弱まったとはいえ、当時の印象では、心を深く傷つけるという点できわめて的確であると思えました。(FK: B. S.336)

劇として上演されることは最高の荣誉とされるブルク劇場で初演され、ヘルマン・パールからは「オーストリアの『ファウスト』」と評されたヴェルフエルの『鏡人』*Spiegelmensch* (1920)について、クラウスは出版当初から『炬火』誌上で、その誤植を含めて辛辣に批判していたが、一年も経たぬうちに『鏡人』の風刺的トラヴェステイー、『文学』を出版した。クラウスのこの執拗な攻撃は、当時の文壇では大きなセンセーションを巻き起こした。カフカは、当時両作品を立て続けに読んだ数少ない読者の一人に数え上げられているが、<sup>3</sup> 自筆原稿の焼却処分をと遺言に託することになるほどに信頼していた友人ブロートに対しても、かつはまた父親の代から親交のあったヴェルフエルに対しても、私的な見解としては上記引用のような、乾いた同情を示すのみで、ヴェルフエルとクラウスの対立に憂慮しつつも、ドイツ・ユダヤ文学を念頭に置いた冷静な考察を名宛人に伝えることに終始する。

ばくはこの本のなかから、単なる機知にすぎないものを、一むろん見事な機知ではあるけれども—それから、哀れむべき不毛なものと、そして最後に真実であるものを、明白にして恐ろしく具体的な例だけでも、現に書いているこの手ほどには少なくとも真実であるものを、かなりはつきりより分けられると思う。(FK: B. S.336)

批評家クラウスの「過ぎた」辛辣な部分をカフカはひとまず措き、クラウスの慧眼にドイツ・ユダヤ

文学の可能性をむしろ期待している。

ドイツ文学は、ユダヤ人が自由になるところできわめて荘重に生きながらえてきたし、ぼくの見  
る限り、なканずく平均して今日ほど多様性がない時代はなかった。おそらくそれでも、ドイツ  
文学は今日、その多様性を失っています。そしてこのふたつの事実が、ユダヤ性そのものと関連  
し、つまり、若いユダヤ人世代が結んでいるユダヤ性との関係と関連し、これらの世代の驚愕す  
べき内的状況と関連していること、このことを特にクラウスは認識しており、否、もっと正確に  
言えば、このことが、彼を尺度にして目に見えるようになったのです。(FK: B. S.337)

形容矛盾ではあるが、拡散としての統一性ではなく、収斂としての多様性が、ユダヤ性とドイツ性と  
の並立を可能にするかのようである。

カフカはクラウスの読書を、彼自身のユダヤ性の測深鉛として、生涯冷静に進めていた。最晩年に  
同じ結核患者として知己をえた年若の医学生ロベルト・クロップシュトックに宛てた手紙（1923 年  
10 月）にこうある。

クラウスの本、拝受。<sup>4</sup>

『最後の日々』の後産でしかありませんが、愉快的な書物です。その他は、ほとんど読んでおりま  
せん。ヘブライ語だけで、あとは新聞も雑誌も本も手にしておりません。(FK: B. S.459)

クロップシュトックとの手紙には、クラウスの名と彼からの引用が時折見られる。カフカには最晩年  
まで、出自の言語であるヘブライ語とともにクラウスの書物が傍らにあった。他方でクラウスは、カ  
フカの死後もなお、彼について沈黙を守ったのであった。

方法に差こそあれ、活動する場も異なるが、私事に対する二人の態度の共通性は、次のようにいえ  
る。クラウスは公的な場に立って、無関心を装いつつ私的なものを擁護しようとした（沈黙）。カフ  
カは公的な場を拒否し、大いなる関心をもって私的なものへの追求をなした。私的なものと公的な  
もの、つまり内と外との境界線の揺らぎを常に経験し、境界線の揺らぎに常に幻惑され、すぐに消され  
るかもしれない線をまた、あえて引こうとする。中心なき揺らぎの中での、彼らにとっての「書く」  
という行為の揺るぎない痕跡が、そこにはある。

## 2. ふたつの「万里の長城」－あるいは中心喪失の時代に「書く」可能性－

### カール・クラウスの『万里の長城』

カール・クラウスの『万里の長城』*Die chinesische Mauer* (1909) は、彼の三作目の論集の題目にもなっ  
ている。これは 1911 年に出版されたが、この論集が編まれるには、紆余曲折があった。炬火創刊後、  
最初の論集である『道徳と犯罪』*Sittlichkeit und Kriminalität* (1908) を出した後、クラウスは次の論集  
を出す準備にとりかかった。表題は『文化と新聞』*Kultur und Presse* で、『炬火』誌上に二度にわたっ  
て近々出版との広告を出していた。けれども結局構想のみに終わっている。この『文化と新聞』準備

中に、アウグスト・ランゲン社からのすすめもあって論集『万里の長城』(1910)を出すことに踏み切った。自身の雑誌広告で『万里の長城』について、「『炬火』の読者には目新しいものはなにもない」とあるとおり、これまでの『炬火』誌上からの抜粋である。しかしながら世の評判という点では、『人類最期の日々』に次ぐものといえ、彼の生前に五度、版を重ね、また『炬火』誌上に載る自作朗読会の予告を見ても、この論集からの朗読会は数多く開かれている。この表題作『万里の長城』は、その論集の掉尾を飾った批評である。

この批評の概要は、当時アメリカで起きた猟奇殺人事件に対する世間の反応を揶揄したものである。エルシー・シーグルという白人女性が中国人の給仕レオン・リンに殺され、鞆に詰め込まれていたというもののだが、事件はこれにとどまらず、レオン・リンの自宅から、上流階級の女性たちからの二千通もの恋文が発見されたことが事態を難しくした。アメリカで起きた地方の事件が、遠くヨーロッパでも大きく伝えられたというもので、それに取材するジャーナリズムのあり方と、大衆のその報道の受け取り方をクラウスは観察している。この観察は、当時はまだ根強かった「人種」に対する偏見へクラウスが投じた一石であるといえる。そして「性」に対するヨーロッパ人の頑なな道徳意識もクラウスの俎上にのぼされるのである。しかしここでは、その批評の内容よりも、批評の手法に注目して論を進めたい。

このテキストには、引用が多用される。なかでもシェークスピアからの引用がことに多い。ハムレットのオフィーリアをはじめとする女性たちへの疑念、リア王の娘への嘆き、ブラバンショーのデスデモナへの嘆きとオセローへの憤りが引用され、人間の類型的な偏見を代表させる。しかし彼らはいずれも自らのことばに殉じた偉大な人々であったことはいままでもない。これに對蹠的に現れるのが、新聞やジャーナリズムである。その後のクラウスの展開した言語批判の足場を築くことになるジャーナリズム批判の一例を引く。

Daß Elsie Siegl starb, ist ein Lokalfall, zu dem die Reporter noch Worte finden mögen. Aber daß bei dem Kellner Leon Ling zweitausend Liebesbriefe von Frauen exquisiter Lebenshaltung gefunden wurden, das macht die Klatschmäuler verstummen und gibt dem Ereignis seine kulturbange Größe. Die Presse, die sich den Kopf der Welt dünkt und nur ihr Schreihals ist, kann uns nicht einmal mit Entrüstung dienen. Kein „Sumpf der Großstadt“ ist entdeckt worden; nicht die Fäulnis jener, die die Moral verletzten, ist aufgebrochen, sondern die Fäulnis der Moral. Hier hat Naturnotwendigkeit des Geschehens über die Lüge der Anschauung das Urteil gesprochen. (KK: *DcM*. S.286)<sup>5</sup>

エルシー・シーグルが死んだ事実は、レポーターたちがまだことばを弄する余地のあるような田舎の事件である。けれども給仕のレオン・リンの住まいに、上流階級の女性たちからの二千もの恋文が発見された事実は、うわさ話を好む者たちの口を噤ませ、この事件に文化を脅かすスケールを付与したのである。世界の頭脳とうぬぼれてはいても、世界の叫喚器にすぎない新聞は、憤慨しても私たちの役に立つことすらない。いかなる「大都会の泥沼」も発見されなかった。突如現れたのは、モラルを傷つけた人の腐敗ではなく、モラルの腐敗であった。ここでは事件の自然必然性が見せかけの嘘に判決を下した。

ここで揺るぎなく正しいと信じられているモラルに、まず疑いの余地があることを分からせてくれ



る。ある固定した立場からものを見たとき、絶句するしかない事態に直面する。すなわちジャーナリズムが戸惑う瞬間である。この事件は、人種に性が絡み、階級制度が事態を一層複雑にし、一視点からでは処理できない問題となったモデルケースである。クラウスはこれに加えて売春、ホモセクシャル、少年愛等々、様々な性愛のかたちを挙げ、いずれに対しても、彼は固定的視点、あるモラルを標榜した一定の見解を取ることを拒否している。敢えていえば、世の中での「モラル」ということばの使われ方にあらゆる角度から疑いをかけるのが、彼の一定した立場である。

ところで、この論のなかで「万里の長城」ということばは次のところで、次のようにしか使われていない。

Und trug Stein um Stein herbei, bis eine Mauer ihr Reich der Mitte umgab, ihr himmlisches Reich. Dieses geschah um 500 nach Confucius. Die große chinesische Mauer der abendländischen Moral schützte das Geschlecht vor jenen, die eindringen wollen, und jene, die eindringen wollen, vor dem Geschlecht. So war der Verkehr zwischen Unschuld und Gier eröffnet, und je mehr Pforten der Lust verschlossen wurden, um so ereignisvoller wurde die Erwartung. Da schlägt die Menschheit an das große Tor, und ein Weltgehämmer hebt an, daß die chinesische Mauer ins Wanken gerät. Und das Chaos sei willkommen - denn die Ordnung hat versagt! (KK: *DcM*. S.292)

そして石また石と運び寄せ、壁が、中心の帝国を囲った。天上の王国を。これは孔子後 500 年頃、起こったことである。西洋モラルの偉大なる万里の長城は、性にのめり込もうとする者たちから性を守り、そして性にのめり込もうとする者たちを性から守った。かくして純潔と欲望の交渉が開かれ、快楽の門が閉ざされれば閉ざされるほどいっそう、期待はことをはらむこととなった。とこのとき人類は大門をたたく。そして世界の轟音が鳴り始め、万里の長城は揺れ始める。混沌よようこそきたれり、秩序は破綻した。

この箇所にはしか現れない「万里の長城」は、クラウスにとって隠喩にすぎない。すなわち西洋モラルの頑強な防壁である。これにつづくのは黙示録第 9 章、第 3 節から第 16 節までのテキストからの引用コラージュである。この黙示録の描写に西洋のモラルの崩壊を擬する。<sup>6)</sup>

ところで引用とは、過去のテキストとの対話である。過去の言葉に耳を澄ますしぐさである。耳を澄ますことによって、散らばっていた断片が寄り集まる。その集積がまた新たな姿を見せてくれる。この姿をクラウスは凝視する。そして最後に、自らのテキストと対話する。

Seine Hand greift nach der Kultur, die ihn durch ihr letztes Augendrehn versöhnen möchte, und würgt sie mit Lust. Kein Entrinnen, die Arbeit geht im Hui - die Knie durch Stricke unter das Kinn gezogen, das Gesicht mit ungelöschtem Kalk beworfen, so verschwand eine Leiche im großen Koffer des Chinesen. (KK: *DcM*. S.292f.)

その手は文化をつかんだ。文化はその最後の目くばせで彼をなだめたかったのだが。その手は快楽とともにその首を締めた。逃げ道はない。作業はさっと進んだ。膝は縄で頬まで引っ張られ、顔には生石灰が塗られ—このようにして死体は中国人の大きな鞆に消えた。

ここでテキストは終わる。けれどもこれは、次に引く冒頭の段落のある部分のヴァリエーションである。

Da geschah es ihr, daß sie an die gelbe Hand stieß, die sie karessierte, würgte und in den Koffer packte. Die Knie durch Stricke unter das Kinn gezogen, das Gesicht mit ungelöschtem Kalk beworfen - so kam sie aus dem blauen Himmelbett in den Koffer... Und nun riecht es in der Welt nach Verwesung.

と、そのとき彼女の身に起こったのは、黄色い手に落ちることであった。その手は彼女を愛撫し、絞殺し、鞆に詰め込んだ。膝は縄で頬まで引っ張られ、顔には生石灰が塗られ—このようにして彼女は青い天蓋つき寝台から鞆の中へやってきたのだった…。そして今、世に死臭を放っている。

ここで引いた部分は、文体から見ておそらくは当時の新聞、雑誌の類からの引用ないしパロディーであろう。クラウドによる引用という断片の積み上げの作業はしかし、冒頭から末尾へと彼の論考により高められ生気を帯び、自己引用による大団円という劇的效果を生み、朗読に資するものとなっている。

#### カフカの『万里の長城建設にあたって』

カフカの『万里の長城建設にあたって』 *Beim Bau der chinesischen Mauer* (1931 年出版) は、詳細な作業工程の描写に始まる。目にしたことのない権威からの命による建設の理由がまことしやかに綴られた後、つづく文章が以下のとおりである。

Nun mag dieser Vergleich während des Mauerbaues außerordentlich treffend gewesen sein, für meinen jetzigen Bericht hat er doch zum mindesten nur beschränkte Geltung. Meine Untersuchung ist doch nur eine historische; aus den längst verflogenen Gewitterwolken zuckt kein Blitz mehr, und ich darf deshalb nach einer Erklärung des Teilbaues suchen, die weitergeht als das, womit man sich damals begnügte. Die Grenzen, die meine Denkfähigkeit mir setzt, sind ja eng genug, das Gebiet aber, das hier zu durchlaufen wäre, ist das Endlose. (FK: *BeK*. S.56)<sup>7</sup>

このたとえば、実際に建設工事が進行していたあの当時にはことのほかぴったりだったであろうが、現在進めているこの報告にとっては、やはりせいぜいのところ限られた意味しかないだろう。もはや歴史に属するものとなった。雷雲は流れ去り、もはや稲妻は走らないなせ工区分割方式が採用されたのかを解きあかすためには、過去が満足した以上のところに吹き込まなくてはならない。私の思考能力に与えられている境界は、なるほど狭いが、ここでめぐるべき領域には際限がない。

生前に発表している『皇帝の綸言』 *Eine kaiserliche Botschaft* (1917) からの自己引用を含め、引用した断片と対話することによる物語作法と、万里の長城建設の工区分割方式による建設方法と、思考の様態との類縁性が、ことば遊びしながら描かれる。断片が他のことばを呼びこむ図式である。そしてこのあと、建設目的への長い考察がつづく。



カフカの『万里の長城建設にあたって』は、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはハツカネズミ族』*Josephine, die Sängerin oder Das Volk der Mäuser* (1924) と構造を同じくし、ある特殊な場を設け、そこで推移する物語をごく客観的に描いてみせる。

しかしここに描かれる分割工事の方法の詳細な描写、すなわち断片とその集積による全体という構想、すなわち城壁の断片の完成を目指す微視的なまなざし、長城完成への巨視的なまなざし、そして目的はなにかはたと疑問に思い夢想しさまよい始める視線。これら三つが交錯し、そのどれもが、意味をなさないかのように描かれる。いわば中心喪失の感情の湧き出す源泉が巨視的な視点から描かれる。これとは対蹠的に、報告の部分が微視的な視点から描かれ、中心喪失の感情がいや増す効果を生んでいる。物語はそして、開かれて終わる。それは、次のまだ書かれぬ断片を求めてのことである。自らが判断した一応の帰結に対しての発言が次のことばである。

Eine Tugend ist also diese Auffassung wohl nicht. Um so auffälliger ist es, daß gerade diese Schwäche eines der wichtigsten Einigungsmittel unseres Volkes zu sein scheint; ja, wenn man sich im Ausdruck soweit vorwagen darf, geradezu der Boden, auf dem wir leben. Hier einen Tadel ausführlich begründen, heißt nicht an unserem Gewissen, sondern, was viel ärger ist, an unseren Beinen rütteln. Und darum will ich in der Untersuchung dieser Frage vorderhand nicht weiter gehen. (FK: *BeK*. S.62)

したがって、このような見解は美徳ではなかろう。それだけ得意に見えるだろうが、まさにこのような弱点が私たち民衆をひとつにする絶好の手段であるらしいのだ。あえて表現すれば、私たちが生きている土壌そのものである。ここで、非難を事細かに理由づけるのは、良心を揺さぶるのではなく、さらに悪いことに、私たちの足下を揺るがすことである。だから私はこの問題の論考をさし当たり進めないでおきたい。

決着は付けるが、「さしあたり」と留保する。ある帰結に至ろうとも、身を翻しておく。すなわちこれが、次の断片を待つ断片の完成である。半ばシシュフォスのように、断片が断片を呼び集め無限に増殖してゆく可能性を帯びてゆく。蓋し中心喪失はむしろ、ことばを探し求める契機である。

## おわりに

カール・クラウスは、批評『万里の長城』のなかで、ヨーロッパの、殊に当時のウィーン市民が抱いていたモラルの虚妄性と偽善性をあばいている。そこでは「万里の長城」は、ヨーロッパ中心の世界観の虚妄なることを示すいわば中心喪失の時代の暗喩として使われている。その8年後の1917年、フランツ・カフカは短編『万里の長城建設にあたって』を書いているが、カフカのそれは長城建設の分割工事の描写に彼の小説技法を想起させる批評性の高い一編である。これは、ロマン派以来つづく「断片」という思考形式の系譜に連なっている。そして断片の集積それ自体が、中心喪失という当時の時代感情と重なり合い、もはや全体性ではなく、断片性しか志向しえない現代の散文の方向性を暗示するかのように見える。

## 註

- 1 Paul Schick: *Karl Kraus in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Hamburg 1965, S.133. 1933年1月24日、O. Forst-Battaglia宛の手紙とされる。
- 2 Franz Kafka: *Briefe 1902-1924*. In: Max Brod(Hg.): *Franz Kafka Gesammelte Werke in acht Bänden*. Frankfurt a.M. 1989. 以下ここからの引用には引用末尾に略号とページ数のみ示す。
- 3 Martin Leubner: *Karl Kraus' „Literatur oder Man wird doch da sehn“*. *Genetische Ausgabe und Kommentar*. Göttingen 1996, S.210.
- 4 マックス・ブロートによれば、クロップシュトックが送ったこのクラウスの本とは『黒魔術による世界の没落』*Untergang der Welt durch Schwarze Magie*. (1922) であるという。(FK: B. S.459)
- 5 Karl Kraus: *Die chinesische Mauer*. In: Christian Wagenknecht: *Karl Kraus Schriften, Bd.2*. Frankfurt a.M. 1987. 以下ここからの引用は引用末尾に略号とページ数のみ示す。
- 6 黙示録の同箇所からの引用を、クラウスは他のテキストの中でも行っている。『炬火』第261-262号に発表した批評『黙示録』(1908年)と、『炬火』第546-550号に公表した詩『黙示録』(1920)である。
- 7 Franz Kafka: *Beschreibung eines Kampfes. Novellen, Skizzen, Aphorismen aus dem Nachlaß*. In: Max Brod(Hg.): *Franz Kafka Gesammelte Werke in acht Bänden*. Frankfurt a.M. 1989. 以下ここからの引用には引用末尾に略号とページ数のみ示す。

